

## 雑誌について

玉井哲雄（筑波大学）

SEAMAIL への投稿という宿題は常に頭の片隅にありながら、なかなか果たせなかった。今回の岸田編集長の督促は、同じ週のうちに2度受ける機会があったため、これまでになく強力に感じられた。そこで重い腰をあげて、硬直しがちな手をキーボードに載せてみる。

SEAMAIL は SEA の機関誌で、おもに岸田さんの献身的なボランティア行為で、発行は遅れながらも個性のある誌面をつくっている。それで思いだしたのが、このあいだの朝日ジャーナルの廃刊騒ぎである。

2年前に父が死に、それ以来、母が一人で住んできた逗子の古い家を、取り壊して建て直すことにした。この古い家には学生時代からの自分の持ち物も、かなり残っている。その整理に結構時間がかかった。その中に、いったん処分しようとして外へ出しながら、思い直して置いておくことにした、朝日ジャーナルの1968年前後の束があった。それが今年の2月の話だが、その直後に廃刊というニュースが他の週刊誌にながれ、だいぶ遅れて朝日新聞もそれを認めた。妙なめぐり合わせだと思ったものである。

5月21日にその最終号が出たので買ってみた。朝日ジャーナルを買うのは何年ぶりだろう。おそらく70年代以降の20年間、ほんの数回しか買ってないはずだ。そしてこのようなタイプの購買層が多かったわけである。60年代末の全共闘運動の終わりとともに、ジャーナルの売上も激減し、この10年は、筑紫哲也、下村満子を起用して挽回をはかったが、うまくいかなかったらしい。

この最終号を見ても、あまり面白くない。廃刊についての感想文みたいなものが多いから、通常の号とは違うところがあるだろうが、それでも不調な理由がわかる気がする。たとえば、主要記事の「ハイパーメディアへの大潮流」は、まずハイパーメディアという語の使い方がおかしい。もちろん、われわれとは違う意味でこの言葉を使っても一向にかまわないが、本文にその意味の説明はおろか、一度もこの単語が登場しないのはどういうわけか。しかしそれ以前に、取材も物足りないし、文章としてもつまらない。この10年、Time を読んできてそれに慣れたせいも、Time の回りくどい英語の方がこの日本語より頭に入るくらいだ。

ジャーナルを振り返る文章では、正確には文章ではなくインタビュー記事だが、安岡章太郎ものもいい。それに比べ、短い文章ながら江藤淳の書いていることは、実に嫌味に満ちている。

しかし、20数年前の自分は、朝日ジャーナルの何を読んでいたのだろうか。東大闘争については、中にいながらジャーナルの記事で経過を追っていたという面はある。

連載で印象に残っているのは江藤淳の「アメリカと私」と高橋和巳の「邪宗門」だが、どちらも連載を読んでいたわけではない。「邪宗門」の方はだいぶ後になって文庫に入ってから読んで、こんなに通俗性のあるものだったのかとびっくりした。最近、高橋和巳はあ

まり読まれていないようだが、通常のイメージと違って、ストーリーテラーとしての才能があった人だと思う。

朝日ジャーナルを読まなくなってから、しばらくは少年マガジンと少年サンデーを毎週買って読み、その後週刊誌を読まない時期を置いて、Timeを読むようになった。朝日ジャーナルがイメージチェンジをしてからのこの10年の若い読者層には、また違う感想があるだろう。われわれ団塊の世代の読者には（とあえて一般化させてもらうが）、すでにその使命をとっくに終えたと思っていた雑誌の終焉の報に、今ごろになって接したという感がある。

60年代がしばしば回顧されても、全共闘運動が思い出されることは少ない。われわれ団塊の世代も、その件については妙に寡黙である。しかしそのシンボルであった雑誌が消えても、あの時代とあの精神をまともに考え直すことの意味はありそうだ。自分にはできそうもないが、そのうち誰かやってくれるのではないかという期待はある。

話は変わるが、日本の雑誌につきものは、巻頭言と座談会であろう。巻頭言は権威づけに、座談会はページ埋めに、便利だからだろう。知っている範囲の外国の雑誌には、どちらもあまり見かけないように思う。手近のTimeとScientific Americanを見てみると、どちらも巻頭は読者からの手紙のページになっている。またたまに討論形式の記事はあっても、「…（笑い）」式の座談会というのを見ないようだ。

SEAMAILには巻頭言がないし、座談会に相当するのはパネル討論の記録ぐらいだろう。その点でも日本の雑誌の編集としてユニークだ。しかし、常に原稿不足をかこつ状態なら、相手を選んだ岸田さんの対談シリーズなどもあってもいいかもしれない。